



上臼

下臼

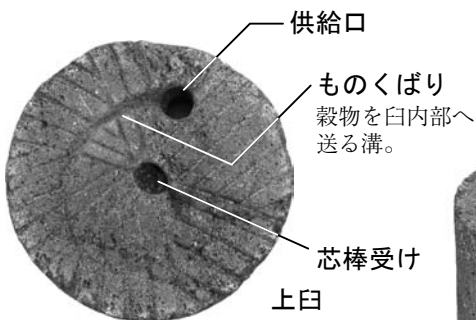
◀側面からみた石臼

上下の臼が重なり合う面は凹凸になっており、上臼の方が下臼よりも、中央部分に傾斜がついている。



挽き木の差し込み口

挽き木の取り付け方は数種類あり、左は、挽き木を支える板を横から差す。右は、挽き木を縦溝に上から直接差し込むもの。



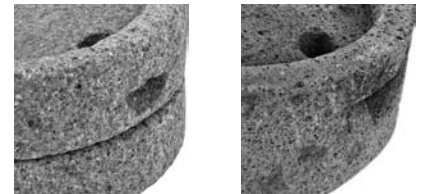
供給口

ものくばり
穀物を臼内部へ
送る溝。

芯棒受け

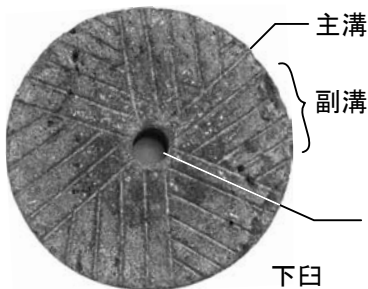
上臼

挽き木
手の中で持ち手が回転しやすいよう、竹筒をかぶせている。



上臼側面の持ち手

挽き木の差し込み口の反対側に、持ち手がつけられたものが多くみられる。



主溝

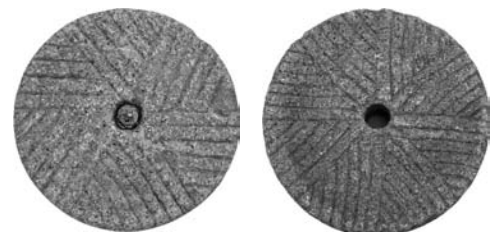
副溝

芯棒用の孔

上臼を支える芯棒(鉄製など)と、棒の固定・高さ調整用の木材が入る。

下臼

臼のすり合わせ面



6分画

8分画

主溝の数により、このように呼ばれる。

寄贈資料の中から

石臼

今回は、粉ひき用の石臼を紹介します。石臼は穀物などを粉にする道具で、江戸時代には一般に普及しました。石材は地域で産出する中から適したものが用いられ、沼津では安山岩のものが多くみられます。溶岩製もあります。炒った大豆を黄粉にしたり、米をひいて団子や餅をつくったりしました。

使い方は、挽き木を持ち、左方向へ摩擦熱の発生を抑えるため、ゆっくり回します。回す方向が決まっているのは臼の目の向きによるもので、右回りでは粉がほとんど出ません。臼の目というのは、すり合わせる面に刻まれた溝のことです。この溝は6つに分かれたものや8つに分かれたものがあります。

上臼の上面にあいた孔は穀物などを入れる供給口です。また、上面は縁を残して浅く削られています。この縁は、臼の回転時に上から入れた粒が飛散するのを

防ぐ機能をもっています。上臼の下面は凹型になっていて、下臼の上面は凸型か平らになっています。上下を合わせると縁の辺りは接していますが、中央部分は浅い円錐状の隙間があいています。この隙間をふくみといいます。上臼を裏返して下臼と並べると、どちらも同じ方向に溝がついています。中心から放射状に出ている溝を主溝といいます。主溝と平行に刻まれている溝を副溝といいます。これらの溝はV字型に刻まれています。上下を合わせると溝が交差をして刃の役目をし、片方の臼が回転することで穀物がすりつぶされます。使用していくうちに石も摩耗するので、目立てが必要になります。目立ては、溝のきり直しや、臼の合わさる面が均一になるように調整する大事な作業です。現在では、工業製品が流通し、目立て職人もいなくなり、家庭ではほとんど使われなくなりました。

駿河湾の漁

川上 貢さんの漁話

峯下漁場での底網

大謀網^{だいぼうあみ}を操業していた晩年頃から小型定置網も並行して操業するようになる。大謀網を止めた後に始めたハマチの養殖が昭和57年に廃業となった後も、この小型定置網^{せうせいあみ}だけは平成20年まで慣れ親しんだ大瀬の峯下漁場で操業を続けた(写真1)。

川上さんが行っていた小型定置網は、当初、コアミと呼ばれる中層域から表層域の魚を狙うものだったが、魚の入り口に3人ぐらいを配置してタイミングよく素手で揚げていかないと魚を逃がしてしまうため、一人でも網を揚げることのできる底層域の魚を狙うための底網を行うようになった(写真2)。底網であれば、袋状の網をウィンチで曳き揚げれば良かった。

底網は26間のウンドウバと15間のノボリアミと15間のハコアミから成る。網を購入し一人でこれらの網を仕立てていく。完成には10日ほどの日数を要した。

大謀網やコアミではウンドウバ(運動場)からノボリアミ(登網)を登って表層域に設置されたハコアミ(箱網)に落ちる仕組みであったが、底網ではウンドウバ(運動場)からノボリアミを下って海底に沈められたハコアミに入る仕組みである。

ハコアミにはジョウゴアミ^{じょうご}(漏斗網)が付けられており、一度入った魚は出られないような仕組みになっている。ハコアミの一番後ろはウオシキと呼ぶ目の細かい網になっている。ハコアミの底には5間おきぐらいに渡されたロープがあり、ウンドウバ側のロープから1本ずつ揚げていくことでハコアミを船に揚げながらウオシキへと魚を追い込んでいく。ウオシキには3~4間ほどのファスナーが付けられており、そこから魚を取り出す。

大謀網では陸側に近いところに張ったため、沖側は沈子^{おもり}を付けて固定したが、陸側は沈子を使わずにロープで直接陸と繋げて固定するオカバリ(陸張り)という手法を採った。底網も同様に陸に近い場所で張ったため1か所か2か所をオカバリにしていた。

底網は魚市場が休みとなる日以外は1年中操業しており、大謀網のように長い休漁の期間はない。網を揚げる回数は1日1回で、魚市場へ持って行かなくてはならないため夜明け後だけである。魚市場に出し終えるとその日の漁は終了となる。大謀網とコアミを並行していた頃は、大謀網の網揚げが始まる前にコアミの網揚げをしなければならぬため、朝の早い作業であった。底網の晩年には魚の数も減り、3日に1回程度の網揚げとなった。

網を海に入れておくと海面から1尋から2尋ぐらいのところにクサ(海藻)が付き、沈子にはフジツボが

付着するようになる。網にクサが付くとちょっとした波で流されやすくなる。沈子にフジツボが付着すると重くなり、ロープと擦れて切れてしまうこともある。そのため、2~3か月に一度は網を浜に揚げて乾かす必要があった。この網を乾かしている期間は漁をすることができない。この間はブイ(浮子)に付いたフジツボを落とすといった底網のメンテナンスに追われることになる。

底網で捕れる魚は、春はアジとイサキ、夏はタチウオとアジ、秋はサワラとアジ、冬はヤリイカが中心となる。冬のヤリイカによる売上が大きく、年間の2/3は冬期間で稼ぎ出していた。

ヤリイカが入り始めると、1日に50kg~100kgの漁獲高が一週間ぐらい続く。魚が少なくなった晩年でもこの時ばかりは毎日網揚げを行った。一番多い時で200kg~300kgのヤリイカが獲れたこともあり、その時はカメ(魚槽)に半分ぐらいの量になった。

※漁師が使う1間、1尋は約1.5mで換算する。

(話：川上 貢氏 昭和5年生まれ 沼津市今沢在住)



写真1：大瀬の峯下漁場で操業していたコアミ
(昭和54年頃 川上貢氏撮影)

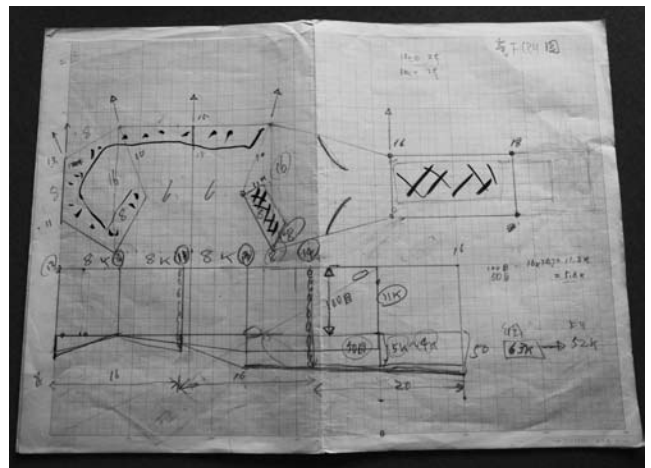
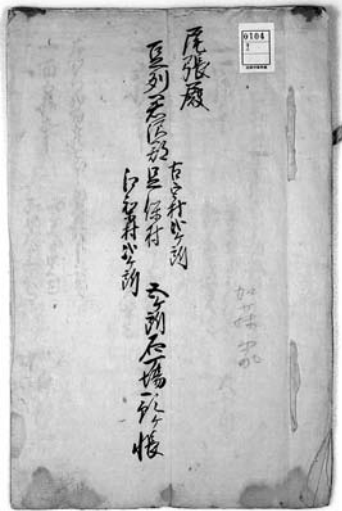


写真2：川上さんが作成した底網の図面

沼津の石丁場遺跡2

にうらあしほ
西浦足保

・尾張徳川家の石丁場



前回の資料館日より、江戸城の石垣用の石材を採るために設けられた石丁場遺跡の中で、西浦江梨にある遺構についてお話ししました。西浦地区には今でも当時の採石遺構が残り、かつ由緒がわかる古文書が伝わる歴史的価値が高い地域です。このような石丁場遺跡は西浦江梨以外にも西浦古字・西浦足保・

西浦久料にも残されています。

例えば西浦江梨・西浦久料に伝わる古文書を見ると、尾張徳川家が西浦地区に5ヶ所の石丁場を確保していたことがわかります。江梨加藤家文書の「豆州君沢郡五ヶ所石丁場預ヶ帳」(写真)には、古宇村に2ヶ所、足保村に1か所、江梨村に2か所の石丁場があることが記されています。この3ヶ村に加えて隣村の久料村には、「石場預り」という石丁場の管理責任者が任命されていて、4人が連帯して責任を負っていました。

・林丁場

尾張徳川家の藩政資料を受け継いでいる、徳川林政史研究所には、足保村にあった「林丁場」の絵図面が残っています。この絵図面によれば、林丁場は長さ35間(およそ63メートル)、幅が13間(およそ23メートル)の大きさで、2,000本以上の切り出した石が残されていたそうです。石の数は西浦地区では最多となり、尾張徳川家にとっては伊豆に設けていた石丁場の中でも、特に重要な場所であったと思われます。

現在、西浦足保には小字名として林の地名が伝わっています。足保集落を流れる川を数百メートル上流に遡った当地には、岩盤が山肌に露出し、その直下には矢穴を掘って割られている石が多数残っています。こうした採石遺構が、数百メートルにわたって分布していて、採石の跡と古文書の内容が一致することから、この付近が林丁場と考えられます。

・朝日丁場

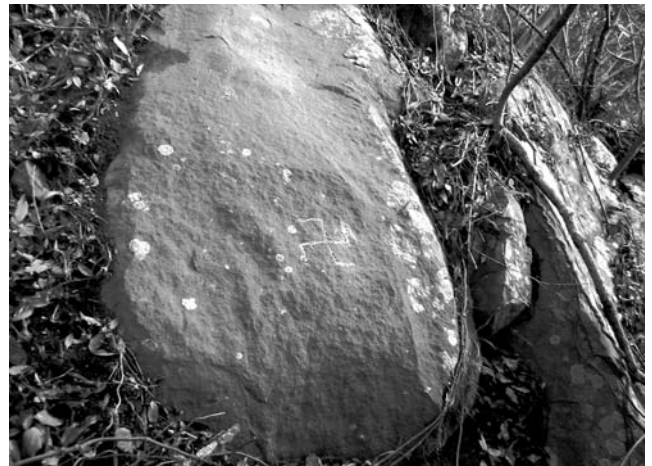
足保村には、もう1か所の石丁場が存在していたことが伝わっています。久料久保田家文書には、四国の阿波(現在の徳島県)の大名である蜂須賀家が、ここ西浦足保と西浦久料に石丁場を保有していたことが記されています。

この2つの石丁場も、尾張徳川家の石丁場と同様に、切り出された石とその周辺の管理が地元委ねられていました。古文書によれば、久料村の朝日丁場は当時の海岸から約6町半(およそ700メートル)のところにあったと記されています。古文書に石丁場の位置が書かれている例は珍しく、やはり西浦地区の石丁場の価値が高いことがわかります。

・西浦足保の刻印石

以前、西浦久料で行われている農道の工事の際、「卍」の刻印が刻まれた石が再発見されたことをお知らせしました。蜂須賀家の家紋が「卍」であることから、この石は蜂須賀家の丁場があったことを証明するものであると考えられています。実は西浦足保にも「卍」の刻印が見つかっています。

海岸から500メートルほど上流の足保川の右岸には、斜面に横たわる大きな石に「卍」の刻印が刻まれています(写真)。さらに斜面を10メートル登ると、同じように「卍」の刻印が刻まれた石があります。これらの石も卍を家紋とする蜂須賀家の丁場を示している可能性があります。上記の古文書の記載とは100メートル以上の距離の差があるため、まだはっきりとしたことはわかりません。いずれにしても、こうした刻印が刻まれた石は、大名家の石丁場であることを示している可能性がある重要な遺構であるといえます。



・石丁場と村の関わり

このように西浦足保には、尾張徳川家の林丁場、阿波蜂須賀家の朝日丁場があり、江戸時代には、石丁場と切り出された石の管理が行われ続けていました。西浦地区の人たちにとっては、大名家の石丁場を預かることは大変名誉なことだったのでしょう。尾張や阿波のお殿様が参勤交代で東海道を通行する際には、鯛を携えて挨拶に伺い、金子や袴、提灯を頂戴していました。

現在は石を切り出した遺構が残っているだけではありませんが、江戸時代の村人にとっては大きな意味のあった西浦地区の石丁場を、ぜひ後世に伝えていきたいものです。

魚見のある風景⑦ 西浦古宇

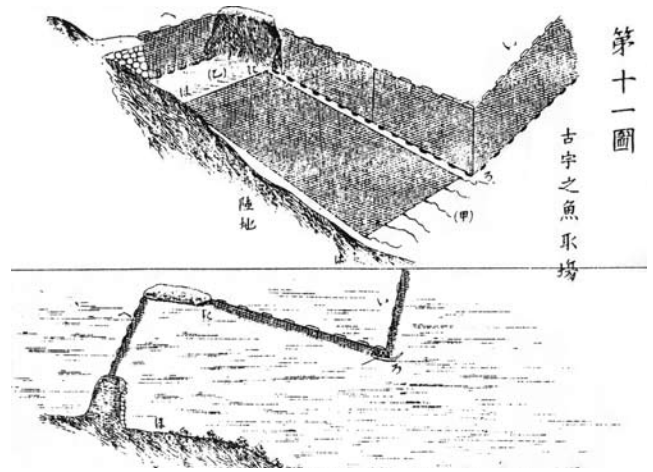


上の写真は、大正3年6月に発行された、勝間田泰平著『伊豆鏡』に掲載されている「西浦村古宇の海岸」と題する写真で、その説明には「…写真に写せるは古宇の漁場にして長浜の網代と同じく鯛鯉鮪等を追込みて捕獲する場所なり…之れ海岸に魚族の近づきたるかを監視する所にして俗に魚見と云う、一度魚群を発見せば魚見より信号し、村人船を出し網をかけて漁場に追込むなり…」とあります。

写真には、突堤の先端に櫓が建てられ、上部の小屋の上に見張台のような施設が設けられている様子が写されています。

ここは、西浦古宇余瀬の高根という漁場で、今でも突堤の一部が残されています。

明治27年2月に静岡県漁業組合取締所が発行した『静岡県水産誌』には「内浦・西浦之建切網」として、袋



のない带状の網を、海底が岩場で、引き寄せるのが困難であるため、幾重にも建ち回し、囲いを次第に狭めて捕らえるもので、網で囲って蓄養できるのも特徴であると記されています。

特に利便性の高いものとして、上図の古宇の魚取場が紹介されており、人工の突堤を繋ぐように網で塞ぎ、海底に網を沈めておいて、魚群が囲いに入ったところで網に結ばれた網を引いて、網を立ち上げ、入り口を塞ぐようになっています。敷網は囲いの途中までしかなく、奥は「…池中にあるが如く数日放養するも差し支えなし」とされています。

写真は、「は」から「に」望んだもので、魚見は「に」の堤先端に設けられていたと見られます。

資料館からのお知らせ

戸田村史民俗編の頒布開始

編纂が進められていた「戸田村史民俗編～暮らしの伝承～」が完成し、頒布が始まりました。執筆・編集には、当館の元学芸員でもある武蔵野美術大学教授の神野善治氏や元当館協議会委員の外立ますみ氏等が携わっています。

入手ご希望の方は、下記で頒布しておりますので、お問い合わせください。(頒布価格 2,000円)

〒410-0873 沼津市大諏訪46-1

沼津市教育委員会文化振興課市史編さん係

電話055-964-2350 FAX 964-2351

なお、市立図書館、本庁7階文化振興課、明治史料館、戸田造船郷土資料博物館でも頒布しております。

松籟の宴2014「白隠禅画展」の終了

御用邸を会場に開催された「松籟の宴2014」の一環として開催した「白隠禅画展」が好評のうちに終了しました。今回は、「白隠禅師座禅和讃」の中の「四智円明の月さえん」の言葉にちなんで、円にまつわる作品を中心に展示しました。



沼津市歴史民俗資料館だより

2014.12.25 発行 Vol.39 No.3 (通巻204号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL: <http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail: cul-rekimin@city.numazu.lg.jp